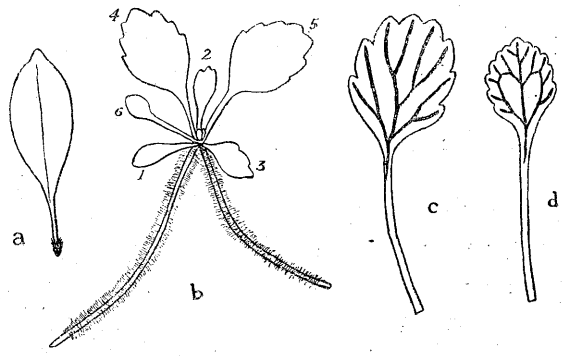
無性芽は去年のと違つて3～5枚の葉が既に出ていて，栽培するとじき新しい葉が出，立派な長い根が1～2本出て小さいながらも一人前の獨立した株になる。圖のbはそれを書いたもので1～5の葉はもとからのもの6は新しく出た葉である。このうちもとからの1～5葉は硬いが6の葉は非常に軟い，又前者はすべて叉狀脈で結合しないが後者のものは親株の葉と同じく網狀脈になるのは面白い。これから寒さに向つてどの程度成長するか見物であるが今年のは去年と比較して非常に活着し易い。これは去年はビルの2階，今年は庭の木の下という條件の違いも考えられるが材料の違うせいかも知れない。あとで氣がついたがこの足摺のコモチシダの植つている鉢には自然に落ちて生えたらしいb圖そつくりの子供がコケの間に幾つもあるので（前葉體から出來たのでない證據は幾つかある）自然でも無性芽による繁殖が出來ることがわかつたが，今年の様な無性芽は活着し易いのかとも考えられる。普通コモチシダの無性芽といえばa圖の様なものばかりの様に考えていたが，a式のものがやがてb式のものになるのか，b式のは又別の型か少しくあやしくなつて來たのでここでは以上の事がらのみ報告することにして色々お教えを仰ぎたいと思う次第である。



コモチシダの無性芽．a，b 共に說明は本文，c は 5 の葉，d は 6 の葉．a，b×7，c×10，d×17.

附記。藤田哲夫氏は昭和7年本誌8(3)：(123)—(129) に「こもちしだ，無性芽に就て述べる」と題して，無性芽を葉面より取り離して土を盛つた鉢に植えたらよく活着したこと（2週間目に約 90% の新株形成を見た，しかし5カ月生存したものは非常に少かつた），植え方によつて活着の工合が違い水分が最も必要なこと，無性芽落下の機構がうまく出來ていることなどについて報告されている。この時の無性芽は圖によるとb式のものであつたようである。

○ホホヅキの古名カガチに就て：（藤田安二）Yasuji FUJITA：Remarks on "Kagachi," the old Japanese name of *Physalis Alkekengi* L.

我國に於けるホホヅキ（酸漿）の古名はカガチ又はアカガチであつて，[1] 古事記の有名な文句に八俣遠呂智の目が赤加賀智（あかかがち）なしとあり，この赤加賀智は今のほほづき也と註しており，日本書紀にも亦ほぼ同様な記事が見られる。和名抄にはこのものの語原を赤赫都實（あかかがつみ）より來るとなすが，著者は決してそうとは思わない。かくの如きは實に單なる語原の俗解に過ぎない。

ペルシャの原産なりと考えられるホホヅキの學名は *Physalis Alkekengi* L. であるが，この Alkekengi はイタリア語の Alkekengi より來る。現在英語にてもホホヅキは Alkakengy, Alkekeng と呼ばれ，佛蘭西にては Alkekenge, 和蘭にても Alkekengi と呼ぶ。[2] これはアラビア語のホホヅキ Alkekengi より來るものであつて Dioscorides にはアラビア語より變化した halikākabos と言う言葉がある。

アラビア語には Alkekengi, Alkikenji の外にKáknaj, Kákanaj, Gulikākanj 等と言う言葉があり，[3]ペルシャの Kakanj, Kákanah より出るものであつて，これ等の語幹はすべて Kaka である。古代ペルシャ語の Kakanj（カカンヂ）こそ我古代語のKagachi（カガチ）に最も近く，この Kakanj より Kakanj→Kakaj→Kagachi となつたものと著者は考えるのである。

然るにサンスクリットにてはこのものを Rájaputrika と言い Kakanj 系とは全く別系に屬する。

現在アラビアにてはホホヅキを hhab-kakeng と言うが，印度のパンジャブにてはヒメセンナリホホヅキ *Physalis minima* L. を同樣に Káknaj 又は Habbi-kaknaj と呼ぶ。[4] ここから更に東方のものは連絡がとだえて，他の南方民族中に同系のホホヅキの稱呼をさがし出し得ないが，現在フィリッピンのタガログでセンナリホホヅキ *Physalis angulata* L. を tutulakak と呼び，ヒメセンナリホホヅキ *P. minima* L. をイロカノにて tultul laki と呼ぶのは[5] この系統を引く貴重なる名殘であると思われるのである。

著者は原産地ペルシャの Kakanj 系の言葉が西方に傳播したと同樣に東方にも傳播し，このものがはるかなる亞細亞の東邊に我古代語の Kagachi となつてわづかに殘つているものと考えるのであつて，我國に於ても，もし古事記，日本書紀がなかつたならばこの言葉は現在殘つていないであろう。8 世紀のはじめに既に「カガチは今のホホヅキなり」と註する必要がある程死語になつていたのだから，これは餘程古い異常な言葉である事は間違ない。

新村氏[6] もこれに關し「ペルシャ語から出てアラビア語に入り中世のラテン語となりスペインやイタリア又フランスの言葉になつているアルカーカンヂと言う語がある。アルはアラビア語の冠詞，カーカンヂはペルシャ語でホホヅキである。日本の上古語のカガチと偶然の暗合とも思えないほどの似寄りである」と書いておられるのである。

著者は前報[7] に於て我檳榔の古名アヂマサが南方系の Areca nuts を示す言葉であつて，アラビアにはこれと全く同音同質の Athmath なる言葉が殘つている事を示したが，この古事記の言葉はホホヅキの古名カガチに於けると完全に同一の現象である。更に著者は古事記中の香木カツラ（Katsura）がアッシリア語の Kasu に連關し肉桂を示すものなる事を主張するが[8] これも全く同じ現象であろう。

これ等の遠くはなれた植物名の一致が偶然の暗合でない事はそのものが實體ある同形

同質である事によつても明かであるが，多くの同様なる實例が集まる事によつて一段とその確實性が增す事となる。これ等の現象は古代に於ける民族と文化との複雑なる移動の結果に外ならぬ。

前報[9]に於て著者は台灣南部に産する芸香科植物 *Clausena lunulata* Hay. がパイワン族によつて Kyaromata と呼ばれ，アミ族によつては Kalumata と呼ばれるが，フィリッピンに廣く産する近似にして近縁の植物 *Clausena anisum-olens* Merr. がタガログにて同様に Kalomata と呼ばれる事實を擧げて，バシー海峽をへだててフィリッピンより台灣への民族と文化との移動を明示する好例と考えたが，又前報[10]の如く九州より琉球，台灣に自生し更に廣く南方に分布する林投 *Pandanus tectorius* Sol. は沖繩にてはアダン（阿旦，阿檀）と呼ばれ，フィリッピンにては主として Pandan と呼ばれるが フィリッピン北端部のイバタンでは既に Padan となり，沖繩の Adan はこの Padan から P がのぞかれて生じたものなる事を示した。この外南方にては一般に廣く Pandan なる言葉が分布し，

馬來　スンダ諸島　ボルネオ　比島　琉球

Pandan → Pandan → Pandan → Padan → Adan

と民族と文化との移動の方向が示されるのである。

これ等の關係は恐らくやゝ近い古代に起つた現象であろうが，古事記に示される様な植物名の遠くはなれた連關は更に一層古い時代に起つた古代語傳播の周邊的殘存現象であろうと思うのである。

民族と文化との移動が波動の様にして起り又傳播して行くものとすれば古いものは周邊に殘り，中心に近い處には新しいものが存在する筈であつて決して一律に連續するものではない。連續している場合にはそれだけで既にその事實が比較的新しく又近い事を示すものである。(26. 5. 23)（通産省大阪工業試驗所精油研究室）

文献 1) 小野蘭山：本草綱目啓蒙，巻 12. 2) Gerth van Wijk: Dic. Pl. Names: 989 (1911). Hegi: Illus. Flora Mitt. Europ., 5-4: 2580 (1927). 3) Dymock, Warden & Hooper: Pharmacographia, Indica **2**: 560 (1891); Hooper. & Field: Useful plants and drugs of Iran and Iraq: 150 (1937) (Field Museum of Nat. Hist. 9-3). 4) Dymock, Warden & Hooper: Pharmacographia Indica, **2**: 560 (1891); Kirtikar & Basu: Iud. Med. Plants: 899 (1918). 5) Merrill: Enum. Phil. P., **3**: 423 (1923). 6) 新村：櫃: 190 (1940). 7) 藤田：台灣博物學會會報 **30**: 245 (1940); **33**: 622 (1943); 香料 **9**: 5 (1949). 8) 藤田：植研 **25**: 63 (1950) 9) 藤田：植研 **26**: 47 (1951). 10) 藤田：台灣博物學會會報 **32**: 321 (1942).